



アイヌ語で「広場」の意味
文 北原モコットゥナシ・瀧口夕美 絵 小笠原小夜

イペアンロー! (いただきます)

道東の厚岸町に「別寒辺牛」という地名があります。どう読むかわかりますか？「ペカンベウシ」、「ペカンベのあるところ」という意味です。アイヌ語の地名は、場所の特徴を表すことが多いです。今回はペカンベ、ヒシの実のしょうかいです。ペカンベは「水の上にあるもの」という意味です。池やぬまの水面にひし形の葉を



「ペカンベ」 ヒシの実 調理法たくさん

広げ、秋にはとげのある三角形の実をつけます。同じ道東の標茶町にある塘路湖は、ペカンベがとれる湖として有名です。かたい皮の中には、ハート形の種子が入っています。アイヌ民族はこれをご飯やおかゆに入れたり、豆のように煮たりして食べてきました。干して保存もできます。生では食べず、必ずゆでます。皮をむくのは大人に手伝ってもらいましょう。下ごしらえは大変だけど、クリヤトウキビのような、ほんのりあまいホクホクした味です。

ペカンベご飯

◇材料

ペカンベ…30～50つぶ
メンクル（いなきび）…大さじ3
米…3合
塩…小さじ2分の1

◇作り方

- ① ペカンベは皮つきのまま洗い、一晩水にひたしてアクをぬく。
- ② なべにペカンベと水を入れ、塩（分量外）を入れて10分ほどゆでる。ざるにあげて冷まし、皮をむく。
- ③ といだ米を水加減して、ペカンベ、メンクル、塩を入れてたく。

カンピノシ(本) 人物伝

知里幸恵は、アイヌ民族として最初のアイヌ語の本を書いた人です。1903年（明治36年）に幌別郡（今の登別市）に生まれ、19歳で亡くなりました。今回しょうかいする本は、残された手紙と日記をまとめたものです。

幸恵は6歳のとき両親とはなれ、旭川の親戚のもとで暮らします。小学校を良い成績で卒業し、旭川区立女子職業学校に合格。両親への手紙にこう書いています。「新聞に『第4位で入学した知里幸恵は「旧土人」である』と書かれるだろうから、ハボ（お母さん）なんか自ひくりにかえて、こしめかすかもしれない」。アイヌに対する当時の差別的な呼び方をはねかえすようにおどけながら、喜びを伝えています。

そのころ、アイヌの物語を研究している金田一京助という言語学者が、東京からたずねてきました。金田一は幸恵に、後の世のためにあなたがアイヌ語を残すべきだと話し、幸恵もそう思うようになります。19歳になろうとする5月、ついに幸恵は東京に向かいました。金田一の家に身をよせ、口伝で残されたアイヌの

ぎん 銀のしずく ちりゆきえいこう 知里幸恵遺稿

知里幸恵著

物語を、ローマ字を使って書き記すためです。ある人がこう言いました。「だまっていればアイヌである」と知られずすむのに、アイヌと名乗って文章を発表すれば世間の人に見下げられるのではないかと。幸恵は日記に「それでもよい。自分のウタリ（仲間）が見下げられるのに私ひとり、ぼつりと見上げられたって、それが何になる」と書きました。人当たりおだやかといわれた幸恵の強い気持ちが表れています。

幸恵は両親にいつも素直でやさしい手紙を書き、自分も家族の返事にはげまされています。東京で暮らしていても気持ちをしっかり持ちつづけたのは、考えをうけとめてくれる家族がいたからだとわかります。

東京の暑さが心臓に悪かったのか、初めてのアイヌ語の本「アイヌ神謡集」の最後の確認を終えた日、ちょうど100年前の9月18日の夜に、亡くなりました。

（1984年、草風館。新装版は2200円）



レウカムイ アレコテク コ
エマチヒ テパア
エトウイエ ナ ラッチノ
ア ワ エンコレ！

アイヌ文化



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

台風のニュースが続いています。ここ数年は、全国各地でかつてないほどの強い風や雨に見舞われることがたびたびあり、人々が危険な目にあったり、農作物がだめになってしまったりと、多くの被害が出ています。

昔の人は、災害にどう備えたのでしょうか。

まず、家を建てたり村をつくらしたときは、大雨が降っても流されないような場所を選びました。でも、気をつけていても、危ないときはあります。そこで、風や雨に備えるおまじないがありました。

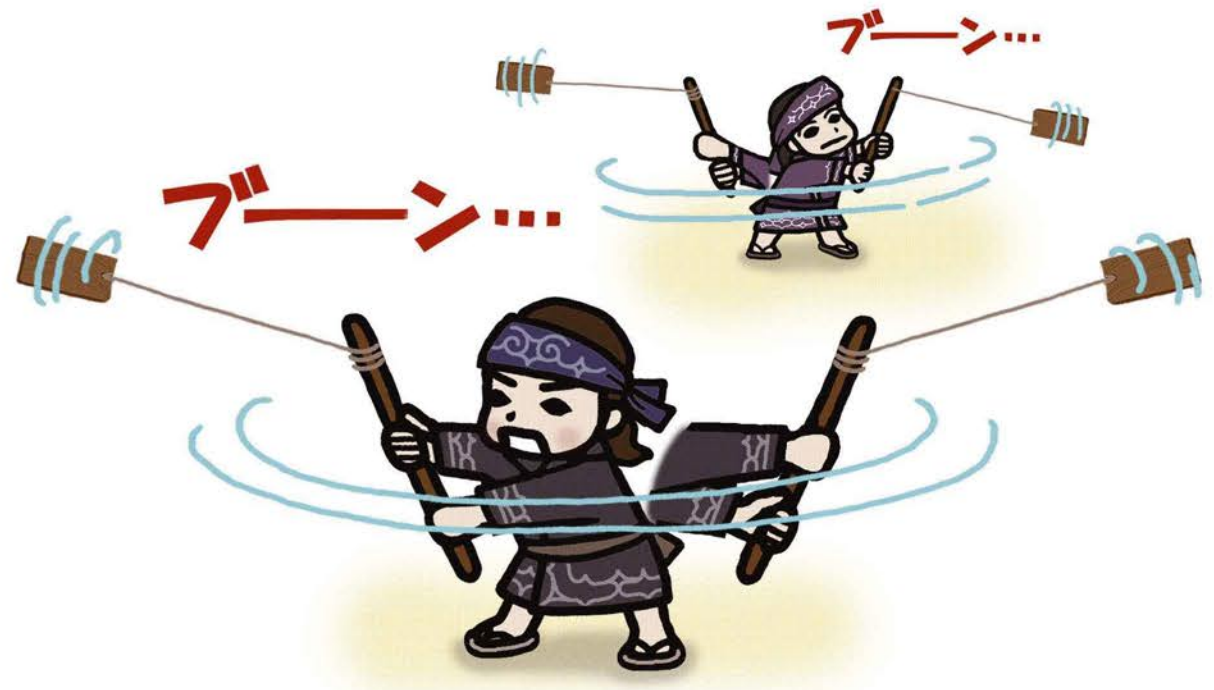
樺太（サハリン）のアイヌ民族には、灰を使って風をおとなしくさせる「まじない」が伝わっています。昔は、どの家にも暖房や調理のための「いろり」があって、火の神様が家の中を守っていました。いろりの灰は、火の神様の体から出たものなので、魔物を追いはらうパワーがあると考えられていました。そこで、風が強いときは、風に向かって「風の目にいれ！」と唱えながら、灰をまきました。こうすると、風は目が痛くて、おとなしくなる、というわけです。

草をかる「かま」を使ったまじないもあります。釧路地方では、風の強い日に、風に向かってかまを高く立てて「あんまり強くふくと、あなたのおくさんの はだ着が切れるよ」と唱えましました。面白いことに、風よけにかまを立てるまじないは、本州の和人の文化でも広く見られます。

強い風

困った神様 まじないで「解決」

レラスイエブ(風をゆらすもの)



いろりの火も風も、生き物という感じはしませんし、声をかけても返事はありません。しかし、昔からの考え方では、火や風にも命があって、人間を守ることあれば困らせること

もあるものだったのです。自然を神様と考えて、人を困らせるのではなく力を貸してくれるようにお願いする文化は、いろいろな国に見られます。

きょうの と ば

● 和人の神様

和人は何においのりするかと考えると、神社の神様やお寺の仏様が思いかびます。また、キリスト教やイスラム教を信じる人もいますね。もともと日本では、神社の神様ばかりでなく、かまどの荒神（火の神）など、いろいろな神様が信じられてきました。また、仏教は、インドのヒンドゥー教の神様や、中国・韓国などの考え方を取り入れながら日本に伝わったので、いろいろなルーツの仏様がいます。

「風切りのかま」は、神主さんやおぼうさんに限らず、ふつうの人々が行ってきた習慣です。福島県や富山県、関東地方、四国地方など、東日本にも西日本にも広く見られます。

● 風の助けを借りる

風も雨も強すぎれば困りますが、かといって全くなくても困ります。例えば、かりをしてとった動物の毛皮を干すときは、たき火でかわかすこともあります。風があるとよくかわきました。そこで、アイヌ民族は、風を呼びたいときにはまじないをしました。

ロープの先に大きな細長い板を結びつけて思い切りふり回すと、板が回転して「ブーン」と大きな音が鳴ります。「レラスイエブ」（風をゆらすもの）という道具で、この音を出しているうちに風がふき始めるといいます。このような道具は「うなり板」と呼ばれ、これも世界の各地にみられる文化です。